

## 樹木葬の評価と限界

著者	深江 誠子
著者所属(日)	平安女学院大学生生活福祉学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	8
ページ	45-52
発行年	2008-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1475/00001262/">http://id.nii.ac.jp/1475/00001262/</a>

## 樹木葬の評価と限界

深江 誠子

### 〇はじめに

この数年、私は葬儀と墓石について文章を書いてきた。<sup>1</sup>とりわけ樹木葬についてはここ数年、全国の樹木葬を実際に見てきた。そして、切実に関西にも樹木葬、あるいは桜葬が出来る山、あるいは寺を探さないと、と実際にいろいろな組織に当たってもきた。

しかし、この樹木葬に関しては、まず、宗教法人の資格が必要だし、出来るだけ広い土地が要る。なにより、これまでの檀家さんたちの賛成なしでは到底実現出来ない、つまり、いくつもの難問をクリアしないとダメであることを、樹木葬のお寺を回りながら実感してきた。ここでは、その樹木葬の何が画期的で、何が限界なのかを探って行きたいと思う。具体的に、全国の樹木葬の現状も写真を掲載する。

何故、この樹木葬が出てきたかの社会的背景については、井上治代は、家族の変化とつなげて、次のように書いている。「日本の産業が農業から工業中心へと移り、高度経済成長を始めた 1960 年頃、核家族化が顕著になった。戦後、農村から多くの若者が都会へ移動し、彼らはやがて都会で結婚した。そこでできた家族が故郷の親とは別居の核家族であった。こうして戦後の第 1 回目の家族の変化が起きた。…核家族は…子どもが生まれて家族が増えても、やがて子どもは巣立って夫婦だけとなり、夫婦の一方が亡くなれば、核家族の最晩年の姿は『独居』である。そして、残る一人の死によって、核家族は夫婦一代限りで消滅する。…80 年代になると、戦後 2 回目の新たな家族の変化が起きた。…家族の個人化である。…80 年代には離婚率が上昇し、晩婚化、少子化、生涯未婚や子どもを生まない選択をするカップルなどがその数を増やした。こういった傾向は墓から見ると、継承者のいない人の増加を意味した。また、自立的に生きようとする妻のなかには、墓を通じて夫側の家への所属を強いられることに苦痛を感じる者もいる。…このような新たな社会的動向のなかで、墓の継承制が制度疲労を起し、90 年代に入ると代替システムが模索されるようになったのである。それを具体的に言うと、継承困難な人々の受け皿として登場した。永代供養墓とか、合葬式墓地などと言われている継承を必要としない非継承墓や、散骨や樹木葬などの自然に還る葬法である。」<sup>(1)</sup>

樹木葬が出てきた背景は、井上の分析どおりであるが、この文章で、私が疑問に感じたのは、「家族の個人化」という言葉である。むしろ「家族の孤立化」ではないだろうか。個人化はそれぞれが、自分を大切にしながらお互いのつながりを確信している関係だと私は考えるからで、それぞれが勝手なことをしているだけなら、単なる孤立化だと思うのである。

### 1、樹木葬の始まり

この樹木葬を最初に始めたのは、岩手県一ノ関にある、臨済宗妙心派の祥雲寺という寺の住職の千坂 嘯峰（敬称略）で、彼は『樹木葬を知る本』（三省堂）で、その経緯を書いている。その本によると、彼は、短期大学の教授であり、中国文学、仏教学、倫理学を教えてきた人であった。その彼が 37 歳の時、祥雲寺 15 世住職のお父さんの圭巖が亡くなったため、翌年一関に転居、彼の子どもの PTA 活動がキッカケで、市民運動を始めることとなった。

それと同時に、荒れた寺の裏山の整備も始めた。1990 年、住職は「北上川流域の歴史と文化を考える会」を立ち上げ、奥州藤原氏の「柳之御所遺跡」保存運動を始めた。そして遊水池事業の道路工事で消えようとしていた遺跡の保存に取り組み成功した。

これをキッカケに「地域を守る」運動から「地域をつくる運動」に変わっていく。1995年に川をめぐる活動をしている人たちと「北上川流域連携交流会」を結成し、2000年にはNPO法人格を取得したのである。

「会では、岩手県岩手町に源を発し、宮城県の海へと注ぐ北上川周辺の地域の人たちが、川を軸として交流、水辺の環境保全、地域の歴史文化の理解、安全で楽しい水辺の創造などに取り組んでいる。県域を超えた川中心の結びつき、国土交通省など官との連携もあるのが大きな特徴である。」<sup>(2)</sup>

この結びつきで、それまで山が好きだった千坂もボートの操縦、水辺の動植物の調査などの取り組むことになったという。そこで、彼は気づくのである。川は川だけであるのではないことに。「里山に産業廃棄物が捨てられると有害物質が雨などにより地面に染み込み、やがて川に入ることもある。川を守るためには山や森も守らねばならないことに住職は気づく」<sup>(3)</sup>この一関周辺の里山が荒廃しはじめてきた。さまざまな理由で、農業を続けられなくなった人たちが、農地を手放し、放棄された農地や荒れに任せる雑木林が増えていく。埴生はオカシクなって産業廃棄物の捨て場となる。一見健全に見える地方の自然も実は荒廃していることに彼は気づいたのである。

「また、住職は、都会での墓地造成が自然を破壊しているのを目の当りにしていた。都会では手を入れることにより、他方では、地方では里山に手を入れないことによって自然破壊が進んでいたのである。この2つの環境問題が住職の頭のなかで結びついたのが、地方の里山に墓地をつくる〈樹木葬〉という構想である。」<sup>(4)</sup>

「大都市では墓地造成のために、『自然破壊』が進み、一方、地方では、手を入れられないために里山の『自然荒廃』が進んでいた。都会に墓地をこれ以上増やさず、地方に里山を利用して墓地をつくれれば両方の問題が解決する。都市の問題を都市だけでなく地方との連携を考慮に入れていく。この広い視点は、住職が『北上川流域連携交流会』などの市民運動の実践をとおして身につけたものだ」<sup>(5)</sup>この経緯には、私も共感できる。私もフェミニストでありながら、環境問題も深刻なモノとして考え続けてきた一人でもあるからである。

黒木昭雄の『葬式の値段にはウラがある』（草思社）によると、「厚生労働省の調べでは、2002年初めに日本の年間死亡者がついに100万人を超え、2038年のピーク時には年170万人が死亡することになるという。…たとえば、現状で年間100万人が死ぬとすると、単純に100万回の葬式がおこなわれることになる。その平均費用が200万円というのだから、なんと『二兆円』にもものぼる市場規模になる。これが170万人ともなれば、3兆4,000万円ととてつもない数字になる。」<sup>(6)</sup>この死者のために墓が作られれば、山がどれだけ壊されていくか、と思うと暗澹たる気持ちになる。

## 2、樹木葬の実現までの障害

樹木葬の実現には、さまざまな障害が立ちふさがっていた。まず、「県が市に事務委任している『墓地経営の許可』の条件に『地元の区民の同意』『隣接地の土地所有者及び使用者の承諾を得る』という項目がある。第1回目の候補地は近隣住民の反対にあい断念した。近辺の『自然観察林』を整えながら、反対者が出ない土地を探した。紆余曲折のあと、平成11（1999）年1月、現在墓地となっている土地取得を決定、同年7月に墓地使用許可を得た。」<sup>(7)</sup>購入したのは産廃業者が目をつけているような、農協などの担保物権として売りに出されているような山であった。彼は以後、契約者が増えたと、地つづきを買い足していった。

「樹木葬墓地は、通常のように区画が出来ているわけではないので、墓地、埋葬等に関する法律（以下、墓地埋葬法）の『埋葬地点を明確にする』という規定には、『3本の基準からの距離を測って記録するという方法で対処した』<sup>(8)</sup>お金がなかったので、銀行の融資を受け、農協から紹介のあった山を買おうとしたが、総代会の了承を取り付けることが出来なかったのである。銀行融資には責任役員

の連帯責任の署名や資産証明、印鑑証明などが必要だったのに、それが嫌だったらしく、結局、千坂が、仙台に買っていた住宅と土地を担保にして個人的に借金をして山を買ったそうだ。それが現在のログハウス「悠兮庵」のある所である。

ここは、一ノ関駅から20分は掛かる上に、西向きの土地なので、買い手がつかない「イナカ」なのである。しかし、千坂は、ここが素晴らしい場所に生まれ変わることを確信されていたという。「なぜなら、須川岳（栗駒山）が真正面に見えるからだ。しかも、人家や電柱がまったく見えず、静寂そのものの空間なのである。……檀家の若手と一緒に刈り払い作業などをしたが、翌平成8年6月、驚くべきことが起きた。広場風に間伐した場所が、ニッコウスギの群落になっていたのである。その後、センブリの群落やツルリンドウなどが、季節ごとに楽しめるようになった。日光が差し込むようになると、荒れていた里山がこんなに美しくなるのだなど実感した。のちに『花に生まれ変わる仏たち』というコピーで樹木葬墓地を世に出すきっかけは、ここに生まれた」<sup>(9)</sup>

次に樹木葬の山を購入しなければならなかった。農協の紹介で久保川流域のところを買収しようと説明会を開き、関係者代表の調印が得られる寸前までいったが、1人のお婆さんの反対でダメになった。あとで分かったことだが、この地区は既成宗教を強く批判することで有名な新興宗教の強いところだったのである。千坂は落ち込んだが、幸いなことに農協が、この近辺の山を、山の荒れ方が尋常でなかったが、改めて住民説明会を開く必要がないことと、隣地に反対する所有者がいらないことで紹介してくれた。彼は次善の場所という妥協の気持ちでその山を買うことにした。それが平成11年4月に、一関市に申請書を提出し、一関の担当者も迷い、岩手県の担当者と何度も相談したようで、中々許可が下りなかった。しかし、ようやく平成11年11月から墓地として使用してもよいとの許可が出された。

### 3、樹木葬の実態。

①、まず、私が訪れたのは、この岩手県の一ノ関の祥雲寺であった。東京でエンディングセンターをやっていて、長く葬儀・墓石を研究してきた井上治代が友人で事前に紹介してくれていたせいでもあるだろうが、千坂さんは親切に新幹線の一ノ関駅まで迎えに来てくれた。場所がとても便利だと思ったのは、祥雲寺まで車で20分ほどの距離だったからである。その道すがら、彼の本にも書かれていた天然記念物の「巖美溪」を通り、その美しさに見とれてしまった。山もあり美しい川もある素晴らしい場所であった。

樹木葬の墓地の入口近くでは、田んぼがあったし、夜はホタルも出るという。しかし、案内に現れた千坂さんが、棒を持っていたので「それは何のためですか?」とお聞きすると「この季節は蛇が出ることがあるので」と聞き、少し怯えてしまったが。

樹木葬にたどり着くまで、足元にはいろんな草が生え、そのひとつひとつの名前を千坂さんは教えてくれた。大きな木もきれいに伸びていて、この山が元荒れた山だったとは、とても思えなかった。空気がすがすがしいのも、草木が多い山にいるからである。本当に自然が蘇っていた。



千坂峻峰氏提供

樹木葬は、もう死んでその土地の下に眠っている人の名前は横に、まだ死んでいないが、その土地を予め買っている人の名前は縦にして書いてある。埋葬は、墓所内に30センチの穴を掘り、遺骨をそのまま納め（カロートも骨壺もない）土をかぶせる。埋めたところに目印として花をつける低木を植える。墓標として植えられる木は2～4メートルになる。エゾアジサイ、サラサドウザン、ヤマツツジ、ガマスミなどである。高くなる木を植えると、その山は密林と化すからである。



墓標購入の際は、契約時に墓地使用料として20万円、環境管理費として1口10万円を3口以上納める。環境管理費は3年以内を目安に分割可能である。ほかに、事務管理費として年8,000円。「樹木葬通信」の発行などの事務費に充てられるそうだ。また、同じ墓域に2体目以降を埋蔵する時は1体につき10万円を納めればよいそうだ。墓石代などはいらず、一般的な埋蔵代と比較するとかなり安くなっている。「環境管理費が必要ということは、墓地購入者が雑木林などの周囲の自然を守るとい意思の表現であり、この主旨の理解者であることが必要条件となる」<sup>(10)</sup>

なお、私が訪ねた折には埋葬風景は見られなかったの、その埋葬の際の写真を千坂さんからお借りしたので、それを彼の許可を得て掲載しておきたい。

ここには樹木葬の設備だけでなく、ここに眠っている遺族や、これから眠ろうと予定している人たちが泊まれるログハウス「悠々庵」があって、そこの前から見る景色は絶景であった。また、契約者の数が1000人にも及んでいたからか、新しく知勝院が建てられていて、今後は樹木葬はこの知勝院で全部が仕切られていくのだそうである。

②、次に、2005年に訪れたのは山口県の宝宗寺であった。まず、場所が不便なところにあった。

新幹線の山口駅からは、バスで1時間ほど掛かったが、飛行機で山口宇部空港からはタクシーで1時間、岩見空港からもバスで1時間、で萩市街地からは津和野または吉部行きバスで約20分、山崎の駅からは徒歩7分だそうで、山口県以外から行くのは大変不便ではあった。ここもまた、高い山の中腹に寺があり、見晴らしもいいけれど、ここの樹木葬は2004年に許可が下りたばかりなので申し込みはまだ少ない。それでも現在は70人の申し込みがあるのだからすごいと思う。ここの値段は半径1メートル平方で50万円と会費が1年8000円。もし、配偶者や子どもが同じところに入る場合は、10万円だけ払えばいい。ご夫婦で樹木葬を始めたのだが、彼らは子どもたちにお寺の後を継がすつもりがないとのこと。「では、樹木葬は誰が管理するのですか？」と尋ねたら、「このお寺を引き継いでくれる人に、しっかり頼みます」という返事であった。写真はそのお寺から眺めた風景と、樹木葬のたずまいである。ここで、樹木葬は後を誰が継ぐかがかなり重要なことだと思った。





③、次に向かったのが、京都の満願寺であった。ここは、京都駅からタクシーで行くしか方法がない。ただ、石材屋さんと提携していて、その石屋さんが、定期的に樹木葬の客を案内するために車で迎えに来てくれる。そこで、その石材屋さんの都合のいい日に出かけた。高槻の平安女学院大学まで迎えに来てくれて、約30分くらいのところにあった。

どうして石材屋さんと提携しているのかが、現地に行って分かった。樹木葬だけでなく、ふつうの墓地もあって、その墓地の石をその石材屋さんが提供していたのであった。ただ、樹木葬は一画だけで少なかった。ここの骨を埋めようとする半径1メートルで35万円ぽっきりだそうである。ただ、配偶者や子どもが入ろうとしても近くに1メートル平方の土地を35万円で再度買わねばならないので結局は高くつく。ただ、「宣伝すれば、京都なのでやる人が来やすいと思うのですが」とお聞きすると、「われらは本業が農業なので、樹木葬を広げる気はないんでね」とあっさりしたものであった。関西で樹木葬をして欲しいと願っていた私の願いは潰えた。

④、次は千葉県にある天徳寺に向った。ここは、東京から外房線の大原駅からタクシーで13分で着く。この大原駅までは東京駅から1時間10分の距離である。私は行くときはタクシーで行ったが、帰りは他の客と一緒に、住職二神成尊さんの車で駅まで送ってもらった。山口県の宝宗寺や、京都の満願寺よりは場所は便利なところにあると言える。

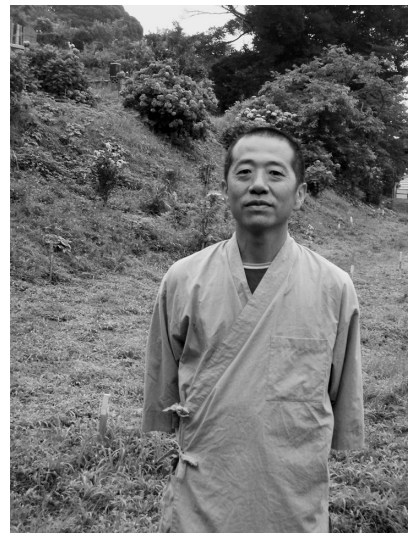
ここの樹木葬は、祥雲寺と同じ1メートル平方で65万円、家族が入る場合は10万円の追加料金を払えば済む。そしてやはり年会費は8,000円であった。

ここの二神さんとはかなり話し込んだ。彼は、私に全国の樹木葬のネットワークを作って欲しい、出来れば瀬戸内寂聴さんに関西で樹木葬をやってもらって欲しい、としきりに頼んでおられた。しかし、「寂聴さんはテレビで見る限り、もうご自分の墓石を用意しておられて、とても樹木葬は相容れないと思いますよ」とお断りした。

けれど、天徳寺から帰って来て、私は真剣に関西で樹木葬をするところを探した。今までもいくつかの候補地に働きかけたけれど、いずれもやろうとしても、無理だったり、障害が大きかった。実際、井上治代も天王寺の大蓮寺に桜葬を勧めているようだけれど、大蓮寺にお聞きすると「なんとか桜葬を始めたいのですが、檀家さんたちの反対で、当分は無理みたいです」との話であった。

ともあれ、この寺は樹木葬を始めたのが2004年からで今は200人ほどの申し込みがあるという。同時に樹木葬の一種で、桜葬といって、桜の木の下に、小さな区画を墓として骨を埋める、その桜葬も始めている。その申し込みは、今では20人くらいである。桜葬は、40cm平方で20万円の値段である。ただ、このお寺も子どもに継がせられるかどうか分からない。いい人物に継いでもらう、と契約者には約束しているとのことである。

⑤、2007年度には、まず東京の井上治代が中心のNPOがやり始めた桜葬を見に行った。東京都町田市にある「永遠の里・いずみメモリアル」の一角にあった。桜葬全体の広さは135平方メートルで、2本の桜の木の下には個別区画が250、共同区画が1つある。個別の区画の1区画は70cm×35cmこの1区画が使用料30万円、環境保全費は21万円。同じ区画に、配偶者や子どもが入る場合は、1人





10 万円。また共同区画には、使用量は 12 万円、環境保全費は 8.4 万円（消費税込み）やはり都会は土地が高い。だから、小さな区画で、桜葬が適しているかも知れない。写真で分かるように 1 区画が狭いのだが、もう 250 は満杯で、同じ霊園内で桜葬の墓地を新しく決めたばかりであった。

#### 4、樹木葬の評価と限界

この樹木葬は、よく散骨と比較される。1990 年代に「葬送の自由をすすめる会」が初めての散骨を行ったそうである。この会では、この散骨を自然葬という。「日本では、海外の遺骨収集という課題もあり、遺骨に対する強いこだわりが散骨を自粛させる背景としてあったのだろう。……現在では『本人が希望するならば』という前提つきであるが、総理府や各新聞社の調査では、散骨（自然葬）をほぼ七割の人が容認するようになった。法律的にも、判例がないから確定したわけではないが、散骨を一定の条件の下で容認する解釈が有力になっている。その条件とは、散骨する目的が死者の葬送にあり、遺骨遺棄ではない場合であって、その方法が『相当の節度』をもって行われるということである。…この相当の節度とは、…1 つ目は、実際に撒く前に、遺骨を細かく砕くことである。原型が残らないよう、遺骨であることがわからない状態まで砕く。…もう 1 つは、他人の迷惑にならないようにすることである。風評被害をもたらすような場所、たとえば海で撒く場合は、養殖場や海水浴場、山で撒く場合であれば、生活用水の近くや農地の近くなどからは距離をおくことが必要条件となろう。…散骨の目的が正当であり、方法が適切であり、かつ本人あるいは遺族の意思として行われるならば、憲法十三条『幸福の追求権』で照らしていえば、散骨の自由は尊重されて当然である。」<sup>(11)</sup>

この散骨を認めさせる運動の発端は、樹木葬と同じ墓地の乱開発への批判である。また、宗教を問わないことや、「墓として墓石やカロート（骨盤収納室）を用いない、ということでは、樹木葬は散骨と同じである。…だが、樹木葬は墓地としての許可を得ている。正式名称は『樹木葬公園墓地』という。…墓地埋葬法でいう『焼骨を埋蔵する』ために設けられた『墳墓』であり、その区域として墓地なのである。…もう 1 つ異なるのは、墳墓であるから、遺骨を『撒く』のではなく『埋蔵する』、つまり、土を掘って遺骨を埋めるのである。正式に許可された墓地であるから、遺骨を砕く必要はない。砕くか砕かないかは自由である」<sup>(12)</sup>

散骨とは、こうした違いがあるが、樹木葬は自然環境、つまり山に植林する、ということでは優れた方法だと思っているし、その樹木葬の予約者や遺族との交流の場所、つまり出会いの場所にもなっているという点で、高く評価している。

しかし、樹木葬を尋ね歩いて見えてきたことがある。第一に、自然を蘇らせるわけだから、千坂さんが棒を持って現れたように、蛇が出るし、地域によっては、野犬が出て、30cm くらいの穴なら、カンタンに掘り返し、骨を食べてしまう恐れがある。

第二には、樹木葬はかなり広い土地を必要とするので、地価の高い都会では無理がある。祥雲寺の

ように、契約者が増えて行く度、山を買い足して、その山を蘇らせるだけの資金は都会ではそうそう集まらない。だからその一種である桜葬は、都会的な墓だと言える。

第三に、その樹木葬を誰が100年あるいは3世代に渡って、管理・運営していくか、である。祥雲寺はそれを考えて、知勝院を樹木葬を管理する組織として、樹木葬の会員を単立の檀家として、会計の監査や株主総会のようなもので、決定する機関にしているが、都会では、そうカンタンに、宗教法人は取れない。千葉県天徳寺の二神さんとはそれについて電話でも話し合ったが、結局、お寺を継ぐ人間が、どういう人柄かが分からないので、使い込みを防ぐ方法はないというのである。

ともあれ、長い将来を保障していくことは至難の業である。天徳寺の二神さんは「いろいろ煩わしいことを考えると、散骨が一番ラクでいい。しかし、散骨は海に撒いたからと魚の餌にもならず、山や宇宙に撒いたからと言って、自然が蘇るわけでもない。結局、樹木葬は、自分の骨が山に植林することに意義があるんやね。だから、もし、管理費を使い込まれても、骨は確実に木を育てているし、自然に還る、という志は果たしたのだから、満足していくしかないものなのよ」との結論であった。

つまるところ、樹木葬の将来は中々見通せない、ということである。しかし、墓は2代目か3代目で墓参する人がいなくなるか、あるいは全く知らない人になる。そう思えば、自分の骨が、1本の木を育てればそれでもいいのでは、とも思う。

私は、墓参を期待しているわけではないが、やはり、小さくてもここに自分の骨が埋まっている、という場所が欲しいし、自分の骨が木の肥料になるならなおいい。だから、今後も是非、関西で樹木葬は無理でも、桜葬が出来る場所を探しつつ行こうと思っている。

#### 【註】

- <sup>1</sup> 平安女学院大学研究年報 No.5号（2004年度分）「日本の葬儀・墓を再考」と、『公評』2004年12月号「葬儀・墓に自己決定を！」に掲載

#### 【引用】

- (1) 千坂彦峰 2003『樹木葬を知る本』三省堂 183～185  
(2) 千坂彦峰 前掲書 9～10  
(3) 千坂彦峰 前掲書 10  
(4) 千坂彦峰 前掲書 10～11  
(5) 千坂彦峰 前掲書 20  
(6) 黒木昭雄 2003『葬式の値段に裏がある』草思社 14～15  
(7) 千坂彦峰 前掲書 12  
(8) 千坂彦峰 前掲書 13  
(9) 千坂彦峰 前掲書 42  
(10) 千坂彦峰 前掲書 4～5  
(11) 碑文谷創 2006『お葬式の作法』194～197  
(12) 千坂彦峰 前掲書 84

#### 【参考文献】

- 1、黒木昭雄 2003『葬式の値段に裏がある』草思社



- 2、千坂彦峰 2003『樹木葬を知る本』三省堂
- 3、碑文谷創 2006『お葬式の作法』平凡社新書
- 4、安田睦彦 1992『お墓がないと死ねませんか』岩波ブック
- 5、井上治代 1993『いま葬儀・墓が変わる』三省堂
- 6、木下晋介 1996『僕の考えた死の準備』法研
- 7、井上治代 2000『最期まで自分らしく』毎日新聞社
- 8、須田治 2000『老病死の寺』川辺書林
- 9、山口奈津江 2005『火葬場より』文芸社

## Merits and Limitations of Jumokusou (natural forest burial)

Masako FUKAE

The family burial system in Japan is going through changes. Jumokusou, (natural forest burial) where succeeding family members do not have to take care of family graves, has recently emerged, and Sakurasou (burial under a cherry tree) is becoming popular as one type of Jumokusou.

However, after I visited several Jumokusou sites throughout Japan, my evaluation of them revealed the limitations of Jumokusou. Jumokusou could bring back to life mountains made from the dumping of industrial waste and it could help guard against environmental deterioration. But Jumokusou is only possible in the areas where land prices are low. In big cities, the land price would prevent Jumokusou except Sakurasou. But even that one requires people to dig considerably deep into the ground to avoid bones being dug up by stray dogs. The most difficult issue here is that there is no way to prevent next generations from having to pour vast resources into taking care of the departed family members' grave sites. Therefore, we should not expect Jumokusou to be anything but a ritual in which one's own bones work as nutrients that help raise trees.

1999年、岩手県の祥雲寺で始められた「樹木葬」が、何故作られるようになったか。それは、この住職である千坂彦峰氏が、山がお墓のために崩されていくこと、あるいは産廃の捨て場として汚されていくことに怒りを感じ、山を蘇らせかけたことからであった。実際、樹木葬を始めたところでは、自然が見事に蘇っている。

しかし、この樹木葬にもいろんな限界が見えてきた。1つは、野犬が出て30cmの穴を掘り返して埋めた骨が食べられる可能性のあること。2つは、これは大きな土地が必要なので、都会では無理であること、だから、東京が始めた「桜葬」は都会的である。3つは、この樹木葬を、誰が100年、あるいは3世代に渡って管理していくか、である。とはいえ、結局、どうせ墓は2代目、3代目で朽ち果てるのだから、自分の骨が1本の木を育てられればそれでいいのではとも思う。